

史
譚

31 かぎやで風節

『今日の嬉しさは、何に例えようか。ちようど花の蕾が露を受けて開くような心地である』。これは何かというね、首里の王様の、琉球藩の王様の長男はね、本妻の長男は、ものを言わなかった。啞だったって。で、その守り役がウフアラグスク（大新城）といって。また、次男は妾の子どもでね、これはまた賢い人だったって。

王様が亡くなって、後継ぎは誰にしようか。王の後継ぎを長男にしようか、また、次男にしようかと、こういう、まあ、役人が集まって世継ぎの問題をあれしたわけさ。

ウフアラグスクといったら、長男、チーグー王。また、次男の抱えのあれを津堅親方といって。これは妾の子どもだがね。で、次男は頭もいいから次男にやろうと。自分が次男のあれだから。で、競争になったわけさ。

最後に決める時に、ウフアラグスク親方がね、

「あんたは今日、何か一つね、声を出さんともう一般のあれになるよ。王様の位には就けないよ」と言つて、心配して言うたって。そしたらすぐ声が出てね。その声がこの歌のあれだったわけさ。それを例えて、『今日の嬉しいことは何にも例えられない。ちようど花が咲くのに、蕾が露を受けて開くのと同じである』と。

これがおめでたいあれでね、その関係で、ウフアラグスクという方は誠に人のいい武士だった。津堅親方はまた、何か賢い方であつたって。その罰で、津堅という島があるでしょう。離島に。その海にもう沈められてね、黒潮巻いて沈められて。「ワッターチキングー」といつてね、浮き上がってきよつたって。一回は。その歌がめでたい歌で。

類話

字米須 仲宗根善道

字伊原 上原孝助

字与座 伊敷清保